

審査の結果の要旨

氏名 中村 高康

義務教育以後の教育は、教育の大衆化に伴い、どのような人びとをどのように選抜するかという問題を惹起する。戦後の日本にあつて、教育の大衆化と選抜とはどのような関係にあったのか。そこには、メリトクラシー（能力主義的選抜）をめぐる社会学的な問題が鋭く露呈する。本論文は、戦後教育を特徴づける大衆的受験競争の中核的制度であつた学力による競争的筆記試験と対峙する制度としての「推薦入学」を取り上げ、この選抜制度の拡大とその帰結を社会学的に分析することを通じて、社会変動と戦後教育の構造変容の関係を明らかにしようとするものである。

この課題を達成するために、本論文では、理論（序章～第1章）、歴史（第2章～第4章）、実証（第5章～第7章）の三部構成で考察と分析が行われる。

第1部（理論編；序章、1章）では、先行研究の検討と理論的考察を通じて、本論文の分析枠組みとなる「エリート選抜／マス選抜」と「メリトクラシーの再帰性」という概念が提出される。マス選抜とは教育の大衆化に伴って登場する選抜の仕組みである。メリトクラシーの再帰性とは、能力の厳密な測定が困難であることから発する、選抜の仕組みに対する絶えざる再帰的な見直しの過程である。

第2部（歴史；2～4章）では、これらの概念を用いて「推薦」制度の立ち上がりの歴史が二つの面から検討される。2章では長期的な視点から、文明史的に見れば「推薦から試験」への流れが歴史的な趨勢であつたことが確認される。それを受けて3、4章では、日本における推薦入学者選抜制度の歴史が解明され、高校段階においても大学段階においても、教育の大衆化によって、推薦制度の導入が図られたこと、そこには選抜制度をめぐる再帰的な過程が含まれていたことが明らかにされる。

第3部（実証；5章～7章）は、本論文の中核部分を占める実証分析であり、高校生対象のパネルによる質問紙調査等のデータを用いて、「マス選抜」としての推薦入学者制度の特徴が明らかにされる。5章ではマス選抜の普及が必ずしもエリートとはいえない生徒を対象としていること、6、7章では、それが専門高校の生徒に代表される、本来大学進学志望ではなかつた非エリート層の生徒を大学進学へと水路づける機能を果たしていることなどが詳細な分析を通じて明らかにされる。

これらの実証分析を受け、終章では、「メリトクラシーの再帰性」理論の可能性と、「エリート選抜／マス選抜」の分析概念としての有効性について議論がなされる。

このように本論文は、推薦入学者制度の成立と拡大という現象を切り口に、現代日本の教育におけるメリトクラシーの変容を理論的、実証的に明らかにし、教育社会学における「教育と選抜」研究に新たな知見を付け加えるものであつた。その点で、今後の教育研究に重要な貢献をなすものと考えられる。以上により、博士（教育学）の学位論文として十分な水準に達しているものと認められる。